

【特別講義要旨 (3) '97. 11. 26 (水)】

文明と人口の対応

畑 井 義 隆

(明治学院大学名誉教授)

文明と人口の対応は、文明は人口にどう影響するか、また人口は文明にどう関与するかという2つの命題に分けられる。このうち前者については、文明は科学技術の発達と経済社会の発展を伴うものであるから、文明は人口の増加の可能性を与える。

理論的にはそうであるが、経済的にはどうであろうか。ところが人類が発生してから長い時間が経っていくつかの文明を経験しているが、人口の変化は近時のものを除いて不明である。従ってこの仮説を正確に裏付けることはできないが、類推的に計量された世界人口の変化を辿ってみると、等比的ではなくて一貫して増比的に増加して来たことが分かる。食糧の方は更に急速な増比的速度で増加してきている。それは人類の栄養水準が現在に至るほど高度化していることから確認できる。人口と食糧を取り扱ったマルサスの原理は、地球規模の場合は適合しないように思われる。

しかしごく最近の人口増加の趨勢は、増比的な増加から減比的増加に転換した。これは現代文明を担っている諸国に起った少子化現象の影響によるものである。このことは現代文明が、従来の経験して来た文明とは極めて異質的なものであることを物語る。

少子化は、女性の高学歴と高就業からく未婚化、高齢結婚、高齢出産によるもの他に、若者の肉体と精神構造の弱体化から来る要因が挙げられる。男性の活力に欠ける肉体と意欲に乏しい精神が、婚姻の遅れと出産を少なくする結果を生むことになった。こういうことになる根本因は、現代の20代30代の若者の肉体が現代文明による化学物質（環境ホルモン）に汚染される一方に、親の高齢出産による遺伝的悪影響から抜け得ないことによるものと考えられる。